

---

## 詩歌・小説の中のはきもの（第9回）

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

---

101 髪結「まあご新造さん、結構なお召し物をありがとうございます」  
奥様「まあ大変だお竹さん、下駄が減っちゃったね。バッテリー駒下駄、あとさきもないねえ。はきにくかろうが、わたしのをはいておいで、この間買ったんで、二度ばかりはいたんだが、よければ持っていっておはき」

★『講談社版 古典落語』の「厩<sup>うまや</sup>火事」から。相手の負担にならないように、新品でなく、下ろしたての下駄をあげる。それなら貰う方も遠慮せずに頂戴できる。昔の人の気の配りようは細かい。私の師匠も、「もう僕は読んだから、持って行きたまえ」と言って高価な本を気前よく下さった。あとで師匠の書齋を拝見したとき、私に下さった何冊もの本が書棚に並んでいた。私は師匠の言葉を額面通りに受け取っていたのである。

102 わたしの足は月がげのたむろである。  
わたしの足は青蛇のぬけがらである。  
わたしの足は女の唾である。  
わたしの足は言葉のほとぼりである。  
わたしの足は思ひのたそがれである。  
わたしの足は  
接吻のほそいしのびねである。

わたしの足は相對の河である。  
わたしの足は  
りんご色の肌のきれである。  
わたしの足はみほとけの群像である。  
わたしの足は飛ぶ鳥の糞である。  
わたしの足は  
ものおとのうへをすべる  
妖言である。  
わたしの足は  
嘴をもつ地獄の狂花である。  
わたしの足は  
陰性のもののすべてである。  
わたしの足をおまへの胸にうめて、  
もだえくるしみは、  
つやめく廃患である。

大手拓次

★『日食する燕は明暗へ急ぐ』の一節。足を「足首から先」などという国語辞典のような味もそっけもない定義で、靴のデザインをしている人はいないだろうが、靴のデザインには、もう少し夢があってもいいのではなかろうか。「飛ぶ鳥の糞」では履けそうにないが、「思ひのたそがれ」とイメージしてデザインしたら、何か面白そうである。足の新しい定義に挑むシューデザイナー現われよ！

103 失意の日白靴よごれやすきかな

草間時彦

白靴の汚れが見ゆる疲れかな

青木月斗

白靴の汚れしよりは大胆に

山澤香り

★昭和30年代までは夏の白靴は珍しくもなかった。今、外国へ行って白靴を履いた人を見ると、そのスマートなことに見ほれてしまう。白靴の流行が消された理由を通勤の混雑に求める人がいるが、車に乗るときだけ履いたっていいのであるから、大方は疲れきった男性の姑息な大勢順応主義に根本原因があるのではないか。であるとすれば、本来ファッションに大胆な女性が白靴復活に乗り出してもらいたい。クールビズなどとっくに実践している保守とは無縁の女性に期待したい。

#### 104 鉄帽に軍靴をはけりどもの骨も

眞鍋呉夫

服を著け靴を穿きさて頭には

タオルを巻きて我が寝たる壕

市丸利之助

★「ノモハン事件より六十余年後の遺体収容」の句。敵に制空権を支配された赤道直下ニュー・アイルランド島カビエンにおける陸軍少将の歌。先年夏、早朝のロンドンの大寺院へ行ったら、広場にいくつもの寝袋が転がっていた。日が高くなり寺院関係者が声をかけて回ると上半身裸で靴を履いたままの男たちが、もぞもぞと袋の中から現われた。日本人が靴を履いたまま寝るのは余ほどの非常時である。靴を履いた遺骨は不慮の死以外のなにものを示すものでもない。

#### 105 靴が好きだ、といえ、げんに思われるかたも多いだろう。

靴は道具である。好きとか嫌いとかいうたぐいのものではない。鍋が好き、とか、パンツが好き、とかいえば奇妙にきこえるだろう。それと同じことだ。あらためて好きだと宣言するほどの話ではないはずだ。

だが、それでも私は靴が好きだ。

五木寛之

★『みみずくの宙返り』から。酒、タバコ、麻薬、これらはみんな中毒になる。私の経験ではオーディオ、登山も中毒になる。なんでそんなに苦勞し、命までかけて山に登るのかと問われた登山家が「そこに山があるから」と訳の分かったような分からないような回答をしたことは有名だ。クレーム処理でお客様のお宅を訪ねて、靴を100足以上持っている人は珍しくないことを知った。一生履いても履き切れませんねと言ったら、「だって靴って可愛いでしょう」と応えた人がいた。靴屋にはいずれも納得のできる中毒患者特有の説明である。

#### 106 映画『ワーキング・ガール』の冒頭

には、主人公テス役のメラニー・グリフィスがリーボックを履いて出勤し、会社に着くや引き出しにしまっているパンプスを取り出す場面があった。日本のOLにとって、あの場面はカルチャーショックだった。というのも、わがジャパニーズOLは、やることがまったく逆。とっておきのパンプスで出勤し、オフィスではサンダルに履き替えるのだから。

島村麻里

★『バービー、あなたはどこへ行くの?』から。アメリカ人にとってオフィスは「戦場」、締りのない格好は許されない。日本人にとって職場は「イエ」の延長だからくつ

ろぐことが認められる。どちらがいいというのではない、ギャップをお互いに認め合えというのが彼女の言いたいことらしい。職場におけるギャップは埋まりつつある。私が驚いたのは、引き出しに靴をしまうことである。日本では脱がれた靴の定位置は机か椅子の下で、こちらのギャップは深いものがあり、簡単には埋まりそうにない。

107 玄関で、わたしは花森さんの靴をはきやすいように、敷居から少しはなし、靴の間隔もあげました。これも花森さんからおしえられたことです。靴はそろえておくものですが、はくときはべつです。敷居に靴のかかとを付け、そろえて出されては、はきにくいものです。ちょっとした気くばりが、おたがいの気もちをかわせます。

唐沢平吉

★『花森安治の編集室』から。花森は、かかとの低いベージュかライトグレーのスエードのスリッポンを著者と働いた6年間履きつづけた。それにしては底が減らないのを不思議に思ったところ、銀座の有名靴店に同じ型の同じ色のものをオーダーしていた。“オシャレ”な人はえてして同じスーツを同時に2着作ったりするものだが、花森のオシャレも非常に贅沢で洗練されたものだったという。

108 「一夜、周恩来先生のお招きにあずかったんだよ。僕も松本君も身にあまる光栄と嬉しかったが、しかしその半面、はずかしさに顔から火が出る思いをしたよ。実は、周先生は粗末なズック靴をお召しなのに、こちら、敗戦国の両人はパリッとした革靴なんだからネ。」

風見 章

★『立派な憲法をおもちですから（住井すゑ）』から。松本君とは松本治一郎。不思議に思った二人がそのズック靴について訊ねると、周恩来は戦争放棄の憲法をもつ国の人はそれで差し支えない。が、中国には、まだ絶対平和の保障がない、だから丈夫な革靴はその日のために蓄えておく必要があると答えたのだという。一国の指導者が“茶絶ち”ならぬ“靴絶ち”をしてまで祈念する理想を持っていたのである。

109 「たとえば、人が死ぬまえに、今までの人生を振り返る時、ああこんな靴を履いていた時代もあったと思いだされるような靴を創りたいんです」。遠くを見つめるような眼差しで話す。

岡田正樹

★『学校で教えない職人の仕事』から。語っているのは靴デザイナーの三原康裕。ナンバーワンよりオンリーワンになりたいという。靴業界にもこういう若い人が増えて、その人たちが生活して行けるようになるといい。自分の人生を見据えて、その上で靴造りに励むこのような人が多くなれば多くなるほど、量産する機械靴メーカーも否応なく切磋琢磨の渦に巻き込まれ、製品の開発に全力をあげるだろう。ボーイズ・ビー・アンビシャス。